

ジャングル・スクール

2013年 ブルーレイ カラー 90分 インドネシア

日本語・英語字幕付き

監督：リリ・リザ

プロデューサー：ミラ・レスマナ

脚本：リリ・リザ

撮影：グンナール・ニムプノ

出演：プリシア・ナスティオン

ニュンサン・ブンゴ

(物語)

スマトラ南部ジャンビにある6万5千ヘクタールの広大な国立公園。その自然豊かな森林の保護を行う環境 NGO ワナラヤの若い女性職員ブテットは、森林に居住する“森の民”（オラン・リンバ）の子どもたちに読み書きや算数を教える活動に熱心に取り組んでいた。ある日ブテットは、マケカル川上流地域を訪問するためジャングルを移動していたが、道中でマラリアに倒れ、川の下流地域の少年ブンゴに助けられる。ブンゴとの出会いを通し、閉鎖的で外部との交流を拒む下流域集落においても、子どもたちへの教育の場が必要であることに気づく。

一方、ブテットの上司バハルは、国立公園の保護を理由に森の民を軽視し、彼らの居住地域や従来の生活様式が制限されている実態を理解しようとしなない。社会的評価を得たいバハルは、ブテットの教育活動を過大に報告・公表するが、肝心の下流地域での活動は認めようとしなない。

意を決したブテットは、上司の許可なしに下流地域へと赴き、学習意欲旺盛な子どもたちに勉強を教え始める。しかし、教育活動に理解を示さない集落の大人たちから「鉛筆と本は災いの元」として拒絶され、ブテットは不本意ながらも集落から撤退することに。一方、違法な森林伐採業者が村を訪れ、森林の伐採同意書に署名を迫る。集落の長老たちは、読み書きができず同意書の内容を理解できない。外部への不信感を抱きつつも、謝礼のビスケットや砂糖と引き換えに同意書に拇印を押してしまうのだ。

その後ブテットは、川の上流と下流の間で商いをするパリヤンの家で授業を再開し、ブンゴも勉強のためにやって来る。しかしこのことが大人たちに発覚してしまう。集落の人々は、村の習わしを破り長老の死を招いたとしてブンゴを非難する。そして亡き長老を悼むため、全員でムラゲンと呼ばれる伝統の長旅に出発する。一方、上司と決裂したブテットは NGO の職を辞し、ついに自ら“森の学校”の設立に向けて動き出す。

ブテット・マヌルン(Butet Manurung)について

1972年2月21日生、本名サウル・マルリナ・マヌルン(Saur Marlina Manurung)。パジャジャラン大学で人類学を専攻した後、スマトラ南部のジャンビ地方の国立公園で環境保護活動を行っているNGOに参加。文明社会と無縁に、奥地で独自の暮らしを守る部族に入り込み、共に生活しつつ、インドネシア語の読み書きや算数を教え始めた(1999年)。その経験の後、オーストラリア国立大学で応用人類学で修士号を取得。“ブテット”はスマトラの女性に一般的な名で、彼女自身はジャカルタ生まれだが、彼女が活動を展開した地域で親しみを込めて、こう呼ばれるようになった。

こうしたNGOの目的は基本的に、国立公園を設立することによりその地域の自然と環境を保護しつつ、その地域独自の発展を促すこと。教育活動も含めて、そのための調査と記録が研究員・調査員の仕事で、地域の文化保護の観点から様々な活動方針や規制が設けられている。ブテットは先住民の暮らしに完全に入り込み、彼らを“守る”のでなく、どうすれば彼ら自身で生きて行けるかを問題にした。“啓蒙”による文明の押し付けでも、“教育”で目覚めさせることでもない。

“開発”とか“発展”の名の下に、スマトラ奥地は急激に変貌し、自然も先住民の暮らしも破壊されている。ブテットにとって、“読み書き算盤”を教えることは、彼らが逃げ切れない文明と対抗するための最小限必要な手段で、これにより生きて行く選択肢を広げられる。一方、何より彼女自身が先住民との暮らしを通じて、近代文明の弱点を、文明人の愚かさを思い知らされる。

彼女のやり方はやがて既存のNGOと齟齬を来すようになり、2003年に独自のNGOを立ち上げる。彼女の活動がどんな風かは、彼女の自伝的な著作「森の学校」(Sokola Rimba)に記録されており、リリ・リザ監督の「ジャングル・スクール」はこの映画化である。この<森の学校>は、今はジャンビばかりでなく、インドネシア東部のヘルマヘラやイリアン・ジャヤでも展開されている。

友成純一(作家・映画評論家)

リリ・リザ監督メッセージ

インドネシアの教育界はブテット・ヌルマンを高く評価しています。スマトラのジャングルでの彼女の仕事が、タイム誌の2004年の『HERO OF ASIA』を受賞したからです。私にとっては、彼女の決意と信頼性にもとづいた献身的活動によって、自分にもインスピレーションが伝染してきたのでした。

この映画「ジャングル・スクール」は、タイムリーな、それでいてエ

キサイティングな旅路の中で制作されました。着想そのものは映画製作の5年前に生まれ、その道のりは、ゆっくりと確実に私たちを東スマトラのジャングルへと導いてくれました。ひとたび自分の私生活と著者の内容の一部を銀幕上の物語に翻案することに同意すると、ブテット自身がマケカル河 (Makekal River) の上流へと私たちを案内してくれました。そして私たちはリンバ族の人々と一緒に仕事を始めました。彼らは自分たちの生活の中に私たちを歓迎して受け入れてくれたし、今まで決して他人には見せなかった自分たちの日常生活を、私たちが真似て演じることを許してくれました。

オラン・リンバの人々が映画の中で自分たち自身を演じてくれると同意してくれ時ほど、私には嬉しかったことはありません。この映画を通じて、私は彼らの生活を学ぶ機会を持つことができました。彼らの好きな食べ物や冗談や、そして悪態さえ学ぶことができたのです。

(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)